

《研究ノート》

マルクス主義理論史研究の課題 (Ⅵ)  
——久間清俊著『近代市民社会と高度資本主義  
— ドイツ社会思想史研究 —』によせて——<sup>(1)</sup>

太 田 仁 樹

1

久間清俊氏は、カウツキー研究者として、すでに久間 [1978], [1981], [1982], [1988] などの研究によって注目を浴びている存在である。とくに [1981] 以後の連続3論文は、レーニンの基準（段階論＝帝国主義政策必然論の有無）によってカウツキーを裁断し、1910年以降のカウツキーを理論的・思想的後退であると評価してきた保住敏彦氏（保住 [1977]）などの研究に対して、1910年以降のカウツキーの議論の中に独自の意味を見いだそうとするものであった。レーニンの基準そのものの問題性がすでに明らかにされている現在<sup>(2)</sup>、久間氏のカウツキー研究の先見性は輝いている。

その久間氏の著作『近代市民社会と高度資本主義——ドイツ社会思想史研究——』（ミネルヴァ書房、2000年）は、標題からみて、概説書あるいは通史的叙述であると判断されるかもしれないが、カウツキーに関する専門的な研究といてよい内容をもっている。

久間氏自身、この著書の狙いについて、あるいは総括として、次のように述べている。

「マルクス・ヴェーバー問題という通時的視点とカウツキー・レーニン問題という共時的視点において拙著の視座を設定した。第1章「市民社会と資本主義の発展」、第2章「市民社会と社会主義」、第3章「市民社会と高度資本主義」、第7章「マルクス、ヴェーバーと現代」が前者であり、第4章「高度資本主義と福祉国家」、第5章「カウツキーの高度資本主義観」、第6章「カウツキーと社会民主主義」が後者である。

焦点は第6章にある。ソヴィエト・ロシアの形成に決定的役割を果たしたレーニンとスターリンに対立するカウツキーの社会民主主義思想・理論の特徴を考察した。とりわけ彼の名著である『歴史的唯物論』において、世界市民（労働者）国家、地球市民への展望が述べられているところが注目されるべきである。

マルクスとヴェーバーという近代資本主義の本質についての対立的把握において、カウツキーはマルクス、エンゲルスの立場に立つ。しかし、ヴェーバーの官僚制化に対する社会民主主義的回答を、世界市民（労働者）国家、地球市民社会という展望において展開した独自性が注目されるべきである。」

著者が自負するように、第6章はレーニンやスターリンの「ロシア・マルクス主義」に対してカウ

ツキーの独自の意義を正面から打ち出したもので、従来のカウツキー研究の欠落を埋めるものとして研究史に一石を投じたものである。

## 2

本書第6章は久間 [1981], [1982], [1988] を発展させたもので、久間カウツキー論の現在的到達点というべきものであろう。

本章冒頭で、まず久間氏は、レーニンの社会主義革命論は、後進資本主義国におけるものであったのに対して、カウツキーの社会主義思想は西欧先進国のものであったと指摘し、レーニン型とは異なる独自の意義をもつものであったと断言し (163頁)、以下でそのことを論証しようとしている。

第1節「帝国主義から超帝国主義へ」で、久間氏は、1910年にカウツキーが「革命的マルクス主義の立場から、漸進的革命主義の立場に変わった」と述べている。この点は、『権力への道』(1909年)を革命的立場の頂点とし、それ以後は改良主義に転換したと評価する通説的理解に同調するかに見えるが、他方で、久間氏は、「彼の革命思想は本質的に『エルフルト綱領』起草から一貫して、漸進的革命主義者であった」(165頁)と、カウツキーが立場を転換したとする通説を批判する。その背景として特にダーウィニズムの進化論思想が強調される。そして「超帝国主義」論もこの思想的な一貫性のなかで理解されなければならないという。〈論点1〉

戦時期の諸論文に関しては、SPD右派の帝国主義擁護論を批判する論文とともに左派の即時革命論に対する批判論文にも注目して、久間氏は、「民主主義と国際平和の回復をめざす、プロレタリアートの原則的利害に基づく行動が有効である」というのがカウツキーの主張であったと強調している。

第2節「ロシア革命批判と漸進的社会主義革命」においては、ポリシェヴィキによる権力奪取(いわゆる「十月革命」)に対するカウツキーの批判を紹介し、カウツキー自身の革命論を明らかにしようとしている。このあたりのカウツキーのポリシェヴィキ批判は、戦前の日本でもいち早く紹介され、また近年も検討の対象となっているところである<sup>3)</sup>。久間氏は、カウツキーとレーニンの違いについて、「ソヴィエト型社会主義を志向するレーニンと、西欧市民社会型社会主義に立つカウツキー」(173頁)の違いであったと評価している。〈論点2〉

久間氏は、カウツキー理論の待機的性格を周知のところとしつつも、その核心に「議会制民主主義に基づく社会主義像があり、それが激動の革命の渦中における政治行動をも規定していることが、見落とされてはならない」(176頁)という。

第3節「スターリン独裁・ヒトラー独裁の批判とヒューマニズム復権の提唱」では、オーストリアへの帰郷後のカウツキーのスターリンおよびヒトラーに対する批判が取り上げられている。

スターリン独裁はポリシェヴィキ独裁の必然的結果であるというのが、カウツキーのスターリン体制把握である。カウツキーの社会民主主義論は、レーニンよりもより深くヨーロッパの市民社会の評価に立脚したものであった」(177頁)というのが久間氏の評価である。〈論点3〉

ナチス認識については、カウツキーの政治的状況判断は甘いものであったと批判される。久間氏は

ここにカウツキーの待機主義的限界が露呈しているとする。氏によれば、カウツキーは社会経済分析は優れているが、社会主義革命へとつなげる運動論がない点で、ルクセンブルクやレーニンに劣っている(180頁)。〈論点4〉

第4節『『唯物論的歴史観』における社会民主主義』では、カウツキーの到達点といわれる『唯物史観』(1927年)が分析されている。久間氏はこの大著の特に第4巻「階級と国家」の第8編「階級と国家の止揚」を取り上げ、カウツキーの社会主義の展望は、プロレタリアートの増大と道徳を梃子に、ブルジョア民主主義の限界を止揚する」というものであり、西欧市民社会型の社会民主主義であったと評価している。〈論点5〉

さらに久間氏は、第5巻「歴史の意味」の第3編「歴史過程の目標」の第5章以下を紹介している。この大著の詳しい紹介としては日本語として初めてのものであり、本格的な研究への先鞭をつけたものと言えよう。

「まとめ」において、久間氏は次のようにカウツキーを総括的に評価している。「カウツキーは、帝国主義論争において、急進派と保守派の社会主義者から批判され失脚した。しかし、彼のマルクス主義は一貫して、近代西ヨーロッパ市民社会の成果の継承者としての賃金労働者階級(プロレタリアート)による社会主義社会の建設をめざす思想・理論であった」(196頁)〈論点6〉、あるいは「カウツキーの主張には、マルクス・エンゲルスの普遍的批判精神の継承を見ることができる」〈論点7〉、との評価がくだされている。

最後に久間氏は、カウツキー・モデルの問題点を3点指摘したうえで、<sup>(4)</sup>「マルクス主義とは何であったのかを知るための最良の思想・理論家」であることを確認して、カウツキー論を終えている。

### 3

何についても一家言あるが芯の通っていない百科全書的な「第2インターナショナルの教皇」である、というカウツキー観をくつがえし、漸進主義的社会主義思想家として終始一貫していたというカウツキー像を提示した点で、久間氏のカウツキー論は斬新であり、研究史に確固たる地位を占めるものとなるであろう。そして、この像を形成するにあたり、1910年以降の諸論文を系統的に分析していることが久間氏の研究のメリットであろう。

さらに久間氏は、この漸進的社会主義思想は「西欧市民社会型」の伝統に立脚するものであり、その意味でカウツキーはマルクス・エンゲルスの継承者であり、レーニン、ルクセンブルクに遅れをとるものではないと主張している。だが、このような位置づけは、カウツキー研究者の言として、心情的には理解できるにしても、問題を含むものであるように思われる。以下、〈論点〉にそくして問題点を指摘してみたい。

まず〈論点1〉のカウツキーが漸進主義的社会主義思想家として一貫していたという理解について。久間氏の理解のとおりであったとすれば、『権力への道』にいたるカウツキーの「左翼化」という事態は何だったのだろうか、そのようなことはなかったのだろうか、という疑問が生ずる。実はこ

の問題は、紹介した第6章に先立つ第5章のテーマであった。そこでは、修正主義論争時のカウツキーについてベルンシュタインとの対比で論ぜられている。久間氏は157頁で、「ベルンシュタインの民主主義論は、資本主義市場経済が高度に発展した現実を踏まえるならば、もっと評価されるべきである」が、ベルンシュタインの資本主義観の不十分さも明白であるので、「カウツキーの（ベルンシュタインに対する）批判は十分説得力がある」としている。だが、同じ頁の次の段落では、「1910年以降、カウツキーは資本主義批判の指導的理論家ではなくなった」と指摘されている。しかも、超帝国主義論、ソヴェト批判においてはカウツキーの議論は現時点からみて正しいものであったとされている。「エルフルト綱領解説」以来のカウツキーの漸進主義が、超帝国主義論やソヴェト批判に直接につながれるとするならば、そしてそこにカウツキー理論のメリットをみるならば、修正主義論争期、あるいは初期帝国主義論期のカウツキーは何だったのであろうか、カウツキーの政策提起の意味合いの変化は、状況の変化なのか、カウツキー理論の内容の変化なのか、この点が不明なのである。

また、カウツキーが一貫した漸進主義的社会主义思想家であったとすれば、1910年以前のルクセンブルクとの関係は如何なるものであったのが問題になろう。ルクセンブルクはドイツの社会主义運動圏に登場したときから急進派であった。急進派のルクセンブルクを漸進主義のカウツキーが子飼いにし、ベルンシュタインを攻撃させたのは、漸進主義者として一貫していたと言えるであろうか、カウツキーの政治思想の内容そのものに変化があったと見る方が自然ではないだろうか。それともカウツキーの側では、愚かな急進主義者と思いつルクセンブルクを利用していただけなのだろうか、ルクセンブルクの側は、カウツキーを漸進主義と見抜けなかったのだろうか、漸進主義者でも共闘できると考えたのか、党内ヒエラルキーをのぼるためにカウツキーを利用していただけなのか、疑問は尽きない。

ヒルファディングとカウツキーの関係についての理解も疑問である。この頁で久間氏は、ヒルファディングをルクセンブルクやレーニンと一緒に急進派の仲間に入れているが疑問である。<sup>54</sup>ベルンシュタインとの対比も問題である。カウツキーは待機主義者であるとは、よく指摘されることであり、他方で、ベルンシュタインは非待機主義者として、ルクセンブルクと同傾向であるということも、よくいわれる。ベルンシュタインは漸進主義でありながら非待機主義で、カウツキーは漸進主義で待機主義というべきであろうか、漸進主義と待機主義はどのような関連にあるのか、この点でのベルンシュタインとカウツキーの思想的特質の久間氏による比較が欲しいところである。

カウツキーを論ずるに際しては、ルクセンブルクやレーニンと対比するだけでなく、ベルンシュタインやヒルファディングとの位置関係も留意する必要がある。それも理論的關係と政治的關係を区別した上で両関係相互の連関も説明する必要があるのではないだろうか。

ついでに言えば、久間氏は、「カウツキーは、ルクセンブルクやレーニンよりも、資本主義経済の強靱さを理解していた。また資本主義社会の長所もよく理解していた」と、同頁で指摘しているが、レーニンについては「資本主義経済の強靱さや長所」の理解について、カウツキーに劣っていたとは思えない。第2インター期マルクス主義者では、レーニンは「資本主義経済の強靱さや長所」を最も強調した論者のひとりであろう。「死滅しつつある資本主義＝帝国主義」という『帝国主義論』で

のレーニンの規定が、久間氏の念頭にあり、このような表現になったかもしれない。そうだとすれば、この点はレーニンの帝国主義認識がヒルファディングの強い影響のもとにあったことを勘案すべきである<sup>(6)</sup>。久間氏は資本主義の強靱さの認識についてカウツキーとヒルファディングとを比較すべきであった。また、「資本主義経済の強靱さ」について語るなら、バルヴスとの比較も逸することができないであろう<sup>(7)</sup>。

次に〈論点2〉に関して、久間氏はレーニンをロシア的地盤に立つ社会主義、カウツキーを「西欧市民社会」型の社会主義として、両雄相並ぶものであるとしているが、これはやや安直な調停ではないだろうか。このような対比が、カウツキーはドイツにおいて妥当性をもっていたし、レーニンもロシアにおいて妥当性をもっていた。両者はそれぞれ限定的な意義をもっていたというような理解を示すものだとするならば、両当事者自身がそのような理解を拒否したであろう。もちろん久間氏はそのような折衷的な理解を示しているのではなく、両者の対比においては明らかに、カウツキーに肩入れをしている。それは久間氏自身が「西欧市民社会型」の社会主義を価値的に選び取っていて、「ロシア的地盤に立つ」社会主義をいわば価値的に劣ったもの、あるいは普遍性をもたないものと判断されていることが伺えるからである（〈論点3〉〈論点6〉<sup>(8)</sup>）。

レーニンを「ロシア的基盤に立つ」社会主義の代表にすることについては、カウツキーの盟友であったメニシェヴィキ<sup>(9)</sup>、例えばマルトフの思想をどう把握するかという問題を、久間氏はどう処理されるのだろうか、との問いを投げかけるにとどめたい。より重要な問題は、カウツキーの思想を「西欧市民社会」型の社会主義と性格づけることが妥当かどうかである。

カウツキー思想を「西欧市民社会型」の社会主義と規定する久間氏には、ある前提がある。それは、マルクスとエンゲルスの思想が「西欧市民社会型」の社会主義である、という前提である。この前提は久間氏にとっては自明のことなのかも知れないが、マルクス主義の歴史を観察するものにとっては極めて奇異なものである。

マルクス主義運動が成功を収めた地域を地理的に観察すると、はっきりした特徴が見られる。世界システム論的にいえば「中心」諸国では、マルクス主義の影響力は限られたものに過ぎないということである。久間氏の表現でいえば「西欧市民社会型」の諸国では、マルクス主義は十分に根づくことがなかったということは、歴史的に自明なことなのである。現代において、西欧地域でマルクスやエンゲルスの継承者であると称する社会主義者は、ごく少数で、その影響力も微少であり、西欧の社会主義者の主流である社会民主主義は、マルクス主義とは断絶した潮流である。他方、マルクス主義を国是とする（していた）社会主義国は、非西欧地域に位置しているのである。

マルクスやエンゲルスは「西欧市民社会型」の社会主義であるという久間氏の性格づけと、この歴史的事実はどのように整合的に説明されるのであろうか？ このような問いに対しては、わが国では早くから一つの回答が用意されている。マルクスやエンゲルスと後のマルクス主義とはその性格が異なっている。あるいは「後進国」に広まったマルクス主義は変質したものであるというものである。一時論壇で流行した「市民社会的マルクス主義」はこのような議論によって、不人気なソ連型マルクス主義と自分とを区別しようとしたことがある。あるいは久間氏も、マルクスやエンゲルスと「マル

クス主義者」との関係がこのように捉えておられるかも知れない。「市民社会的マルクス主義」の議論は、レーニンなどの「マルクス主義者」とマルクスの差異面にのみ焦点を当てるもので、主要な側面である共通面を無視するもので到底学問的検証に絶えるものではなく、当然にも廃れていったものであるが、「中心」諸国（あるいは「先進資本主義」諸国や「西欧市民社会型」といわれる諸国）において、マルクスの主張を継承する運動が影響力を持ちえなかったのは何故かを説明できない点でも、無力な主張であった。カウツキーのマルクス主義史における位置は、実は、非「西欧市民社会型」のマルクスやエンゲルスの思想を継承したことの困難さという観点から考えることで、より明らかになるのではないだろうか。

マルクスと「マルクス主義者」の関係は、両者の言説を体系的に吟味・比較することによって、特にマルクス主義者の諸潮流を網羅的に検討することによって、初めて明らかにされることであるが、ここではマルクスやエンゲルスの思想は「西欧市民社会型」の社会主義であったのか否かに絞って考えてみよう。

#### 4

マルクスとエンゲルスの思想の核心は「プロレタリアートという特権の主体による全人類の普遍的な解放」の主張といえることができる<sup>90</sup>。プロレタリアートを人類史のうちでも特別に重要な存在であるとする「プロレタリア主義」と、利害対立による社会的闘争のない「千年王国」的なユートピアの実現である。特定の社会集団を特権化することと「千年王国」の実現とは、「西欧市民社会型」な思想の中には見られないものであろう。この思想的核心はエンゲルス以後の「マルクス主義者」においても継承されている。このように特徴づけられる思想を「西欧市民社会型」の思想と性格づけることができるのか、ということが問題なのである。

マルクス主義国家は搾取者を抑圧することを公言する国家である。マルクス主義政党においては、労働者階級の出身者と小生産者階級および資本家階級の出身者が黨員になるにあたって差を付けられることがある。このような「マルクス主義者」の振る舞いは、マルクス自身によるプロレタリアートの特権化を典拠としている。「西欧市民社会」とは、特定の社会集団が抑圧や差別の対象となることを「タテマエ」としては否定する社会である。「法の下での平等」を「タテマエ」とする社会といってもよい。現実としての「西欧市民社会」においては、特定の社会集団に対する抑圧と差別がないわけではない。むしろ抑圧と差別に満ちた社会といってもよいであろう。その意味では欺瞞的な社会である。しかし、「タテマエ」だけでも「法の下での平等」が謳われている社会は、法的権利が社会成員の内部で明示的に差別されている「身分制社会」とは異質な社会である。マルクスによる特定の社会集団（プロレタリアート）の特権化は、運動の中に、そして過渡期の国家の中に、露骨な差別が導入される際の理論的根拠となっている。「西欧市民社会」における支配・抑圧が欺瞞的なものであるのに対して、マルクスの構想する（過渡期の）国家の支配・抑圧は露骨なものである。その意味で「プロレタリアート独裁」とは「身分制社会」の復活ともいってもいいような状態をもたらす。「マルクス主義者」の支配している（いた）「現存（した）社会主義」とはそのような側面をもっている。それ

らの国の「マルクス主義者」はマルクスを歪曲したのではなく現実化したというべきであろう。

西欧思想のなかには、ナチスのように特定の社会集団（「北方人種」）を特権化した思想もあった。その意味ではマルクスの思想が非西欧的なものであるとはいえないかもしれない、だが特定の社会集団を特権化する思想は「西欧市民社会型」の思想とは呼ぶべきではないであろう。特定の社会集団の特権化は、自己をその集団と一体化するとき、ただちに恣意的な人治を正当化する論理になる。「西欧市民社会」はそのような人治を排し、法治（「法による統治」）を如何に保証するかに腐心してきたのである。

関連した問題であるが、マルクスの中には、権力の行使が搾取者によるものであることを批判する論理はあるが、権力という存在そのものをチェックする思想がない。「自由人の連合体」という「千年王国」が可能であるという「ユートピア的観念」がその根底にある。「西欧市民社会型」の思想においては、統治者（権力者）の恣意的な権力行使をどのようにチェックするのかということが主要な論点となっている。「法による統治」とは政治権力そのものが被統治者の権利を侵害する可能性があり、そのような権力の濫用を如何に防ぐかという問題に対する一つの答えである。立法、行政、司法などの政治権力の分割という仕組みも、権力の肥大化や濫用を防止するために考えられたものである。マルクスにおいては、統治者と被統治者との間にある矛盾は、そのものとしては見逃されている。現存社会における両者の矛盾は、搾取者と被搾取者の対立と意味づけられ、将来の無階級社会における統治者と被統治者との対立の存在は考慮の範囲外に追いやられるのである。「自由人の連合体」が可能であるという「ユートピア的観念」が、問題の存在に眼を向けることを妨げている。未来社会に対する「ユートピア的観念」は、過渡期社会における権力の無制限性を容認させることになる。マルクスはバリ・コミューンのなかに過渡期社会の権力としての「プロレタリア独裁」を見出したが、その特徴の一つは権力の集中ということである。マルクスによるそのようなコミューン理解は、権力分割という「西欧市民社会型」のものではなく、近代以前の共同体権力の復建を想起させるものであった。

マルクスの権力批判は、搾取者が権力を持っていることから生ずる弊害を指摘する点では鋭いが、「マルクス主義者」と称する権力が成立したとき、それをチェックする論理を持たないので、「マルクス主義者」の権力に反対する「マルクス主義者」は、現在の権力者が「ニセのマルクス主義者」であるという形でしか権力批判をすることができない。現存（した）マルクス主義国家の現実には、マルクス思想の非「西欧市民社会」性を物語っている。

「マルクス主義者」は「法プロセス」を軽んずる。「実質的正義」の実現を重視するので、「手続的正義」を軽視するのである。これは西欧以外で権力を握った「マルクス主義者」の論理であるが、法に対するこのような態度は、マルクスの態度の継承である。彼らには「法プロセス」そのものが個々人の権利を守るとか社会的紛争の先鋭化をくい止めるという発想はない。権力そのものの肥大化のチェックとか法プロセスの重視などは、「西欧市民社会型」の思想の不可欠の要素であるが、マルクスを含めた「マルクス主義者」にはこれは見られない。政治文化・法文化の理解という点では、マルクスの思想は「西欧市民社会型」の思想とはいえない。「マルクス主義者」による統治は、身分制的な統治の復活を思わせる場合が多かったが、これは「マルクス主義者」がマルクスと異質なのではな

く、マルクス的な政治文化・法文化理解を継承したからである。カウツキーが議会制民主主義を重視したとすれば、マルクスやエンゲルスの思想の継承ではなく、それとの断絶であるというべきであろう。

## 5

マルクスは、当時の最先進国イギリスを例証の場として、資本主義的生産様式を分析し、その分析からプロレタリアートが変革主体であることを証明しようとした。マルクスは資本主義社会の最先端の遺産を継承して彼の社会主義・共産主義を構想した。したがって、マルクスの思想は「西欧市民社会型」の思想であると判断することは自然なことであるように見える。しかし、それは表面的な観察である。

マルクスの思想を含めたマルクス主義は「西欧市民社会」を外側から批判した思想であると判断するのが適当であろう。「国民共同体」から排除された者の思想と呼べば、より適切であろう。近代国家はウォーラスティンのいうインターステイトシステムの形成とともに出現する。近代国家は当初、周辺部には成立せず、中心と半周辺にしか存在しないが、「国民共同体」を基盤として持たねばならない。「国民共同体」には、西欧のそのように民主主義的外観を整えることのできたものもあれば、明治日本のようにより「身分制」的性格の強いものもある。「西欧市民社会」は、世界システムの中心部近くに存在した「国民共同体」の一つのあり方である。マルクスとエンゲルスは、近代世界においてプロレタリアートを包含する「国民共同体」が成立していることを認めなかった。『共産党宣言』では「プロレタリアはまずもって政治支配を獲得し、国民として自分を形成しなければならない」といっている。プロレタリアートは近代世界システムにおける「国民共同体」から排除されているので、彼らが国民になるのは近い将来の課題であるというのである。「西欧市民社会」とは構成員相互が対等な同市民的関係を取り結んでいるという「タテマエ」の社会である。マルクスはそのような「タテマエ」は虚構であり、現実には階級社会であると鋭く指摘した。しかし、「国民共同体」は根拠のないものではなく、プロレタリアートもまた「国民共同体」のために互いに戦うものであり、プロレタリアートのインターナショナリズムこそが実体のないものであることを、世界戦争が起こる都度、マルクス主義者は痛感せねばならなかった。そして「西欧市民社会型」の「国民共同体」の方が、「身分制」的な性格の「国民共同体」よりも強固であることも、2度の世界戦争は明らかにしたのである。

マルクスは、「西欧市民社会」を含む「国民共同体」にプロレタリアートが巻き込まれていることを見抜けなかった。そして、マルクスが「西欧市民社会」のなかから継承すべきだと考えたものも貧弱であった。マルクスは、「西欧市民社会」における法治（「法による統治」）は階級支配の現実を隠蔽するものであることを告発するのみで、「法による統治」に積極的意義を認めることがなかった。「法による統治」と「国民共同体」の強固さとは密接に関係している。一方を軽視する者は、他方も軽視することになる。人が人を統治するという事態そのものを廃絶することは不可能であるという現実的判断にたてば、どのような統治が「よしまし」なものであるか、という問題意識が生ずる。だ

が、廃絶可能だと考えるなら、そのような思考は現状肯定に見えてしまう。

マルクスの思想の核心部分をなす、プロレタリアートという特定の社会集団の特権化と「自由人の連合体」（＝統治者－被統治者関係の消滅）というユートピアとは、「西欧市民社会型」の思想とはほど遠い。このことは「マルクス主義者」は世界システムの中心部（久間氏のいう「西欧市民社会型」の地域）では大きな影響力を持ちえなかったことと照応している。現存（した）マルクス主義政権は、マルクス主義の核心的部分を忠実に継承している。議会制民主主義を重視したカウツキーは、マルクスやエンゲルスに較べれば、その立脚点は「西欧市民社会型」に近いが、特定社会集団の特権化を完全に否定できない点で「西欧市民社会型」とは距離がある。

「マルクス主義者」のなかでも社会民主主義者たちは、戦間期にドイツやオーストリアで政権に参加したけれども、マルクスのいう「プロレタリアートの独裁」を行うことはなかった。逆に政権への参加と失敗の経験は、社会民主主義者をして「西欧市民社会型」の発想の必要性を痛感させた。特定の社会集団の特権化と敵対なき社会というユートピア的発想は消失した。第2次大戦後のクライスキー（1911－1900）やブランド（1913－1992）の再出発はそれをまっぴらで初めて可能であった。

「国民共同体」の成立していなかった周辺部では、マルクスの思想は大きな影響力を持ちえた。統治の消滅というユートピアは、宗教的世直し思想が持つと同様な活力をマルクス主義運動に与えた。工業プロレタリアートの希薄なこの地域でのみ、「マルクス主義」は「プロレタリアートの独裁」を実行しえたのである。その実状は「身分制社会」の再現であった。「西欧市民社会型」ではなく「身分制」的な性格の強い、「国民共同体」の成立が不十分な半周辺部では、マルクスの思想は知識人層に一定の共鳴盤を見出しえた。統治者と被統治者との間に「同じ仲間同士」という意識（「国民感情」）が成立しているところには、マルクスの思想は浸透は困難である。

マルクスの思想と「マルクス主義」との関係は、政治文化・法文化の理解に関していえば変質でもなければ歪曲でもない。「法による支配」の欺瞞性の暴露と「実質的正義」の追求である。その基礎には、プロレタリアートの特権化と社会的敵対の消滅の可能性というユートピアがある。このような発想は、近代世界システムの中心部では社会的共鳴を得ることができないが、周辺部では大きな力を持つ。この事情が「マルクス主義」が周辺部で成功し、中心部で無力であることを説明する。このような理解に立ったとき、カウツキーの位置はどのように説明できるであろうか。

『エルフルト綱領解説』でのカウツキーの立場は、プロレタリアート中心主義、特定社会集団の特権化という意味で、「西欧市民社会型」のものではなかった。この点ではマルクスを継承するものであり、他の「マルクス主義者」とも差異はない。「エルフルト綱領」そのものは、非西欧地域のマルクス主義者に広く受け入れられている。実際のドイツにおいては、プロレタリアートは、ビスマルク以来の国家による国民統合の成果として「国民共同体」に包摂されていたのであるが、大戦勃発までマルクス主義者はそのことを理解できなかった。社会民主党に投票する労働者たちは、「国民共同体」内部での地位向上を目指す存在であり、「マルクス（主義）」的に意味付与されたユートピアの担い手ではなかった。実際の労働者とこのマルクス主義的意味付与との乖離が暴露されるまでの束の間が、カウツキー的「正統的マルクス主義」の存在期間であった。ドイツでは、それは「エルフルト綱領」から大戦の勃発までであったといえるであろう。しかしすでにそこでもカウツキーの革命的言辭

は労働運動の現実からは遊離していたのである<sup>11)</sup>。カウツキー自身も「法による支配」に対し、マルクスやエンゲルスのような否定的な態度に終始していた訳ではない。ドイツ社会民主党は選挙制度の改革等、具体的な法制度の改革問題に対して具体的な態度をとることを要請されたのである。にもかかわらず、マルクスのプロレタリア革命主義を墨守しようとしたところにカウツキーの苦渋があったのではないだろうか。プロレタリア革命主義とユートピア的幻想の清算がなければ、「西欧市民社会型」の発想はありえないであろう。

「西欧市民社会」的な社会主義思想で、今日の西欧の社会民主主義をイメージするならば、社会民主主義政党は強力な労働組合を基盤にしていることが多いが、理念的には、特定の間人集団を特権化をすることはなく、「千年王国」的ユートピアもない。普遍的な理念とそれを具体化せんとする現実的政策が現代の社会民主主義である。晩年の『唯物論的歴史観』においても、プロレタリア主義を払拭できなかった〈論点5〉カウツキーは、マルクスやエンゲルスよりも「西欧市民社会型」に近づいたが、「西欧市民社会型」になることは出来なかったのではないか。プロレタリアートの特権化というマルクスの残滓を付けている限り、カウツキーの思想は真に「西欧市民社会型」のものとはなりえなかった。このようにカウツキーの思想を考えるべきではないか。マルクス・エンゲルスの継承者であったからこそ、カウツキーの思想は一時期のドイツ社会運動の表層に生息することができたが、第1次大戦後に影響力を喪失し、第2次大戦後はドイツ社会のどこにも残存することができなかったのではないのか。マルクスとエンゲルスの思想そのものが「西欧市民社会型」であるという思い込みを再検討すること、これがカウツキーの生涯がマルクス主義研究者に教えていることではないのか。それは、西欧思想そのものが今日の視点から見て限界を持つこととまったく別の問題である。

マルクス主義を考えるうえで刺激的な著作を提供して下さった久間氏に感謝したい。

#### 註

- (1) 本稿は、第8回ポスト・マルクス研究会(2001年3月29日、熊本)において、報告したものに手を加えたものである。著者の久間清俊氏のほか、コメントをくださった参加者の皆さんに感謝したい。
- (2) 私は、太田[1989]で、レーニンの帝国主義認識の欠陥を方法論的に指摘した。相田慎一氏は、相田[1993]で、ドイツ資本主義論の観点から、大野英二氏に全面的に依拠することで、レーニンの段階論に基づくカウツキー論に対して批判を加えた。なお、太田[1994a]、太田[1994c]をも参照。
- (3) 例えば、Salvadori[1976]、山本[1981]、佐久間[1986]を参照。
- (4) カウツキーの3つの問題点とは、①賃金労働者階級(プロレタリアート)が理想化され、その存在・価値観・機能の客観的分析が不十分であること、②民族・市民社会・国家・世界国家の歴史的形成・発展が、賃金労働者階級の増大=階級闘争の激化=人間主義(ヒューマニズム)の増大という定式(シエマ)で画一的に把握されること、③科学、技術の生産力と環境の共生がいかに可能かという問題について不十分であること、である(197頁)。
- (5) Mandelbaum, K. [1926]も、ヒルファディングを急進派に分類しているが、理解不能である。
- (6) この点は、太田[1989]第4章を参照。
- (7) パルヴスの資本主義認識の検討については、田中[1989]が必読であろう。
- (8) しかし、久間氏の議論にはレーニンに対する遠慮が感じられるのである。〈論点3〉では「カウツキーの社会民主主義論はレーニンよりも深くヨーロッパ市民社会の評価に立脚し」ている点で優れていると主張しているが、〈論点4〉では運動論がない点で、ルクセンブルクやレーニンに劣っているとして、一歩引いている。しかし久間氏の立場から言えば、西欧市民社会の評価に立脚していない運動論が如何ほどの価値があるものであろうか、そのような運動が権力を獲得して何の意義があろうか、否定的な評価以外に下せないはずではないだろうか。久間氏には、氏の立脚点からは理解

しにくい、レーニンやルクセンブルクに対する肯定的評価が見られる。不可解である。

久間氏が全面的なカウツキー賛歌にまで進めないのは、「カウツキーの社会主義思想・理論では、高度に発達した現代資本主義経済の分析は十分ではない。また、現代世界の歴史認識において、近代西ヨーロッパ市民社会モデルがどこまで普遍性を持ちうるのかも明白でない」(196頁)という判断があるからかもしれない。このような判断は、思想史研究者としての久間氏のバランス感覚といえよう。

- (9) カウツキーは、メニシェヴィキと密接な関係をもち、民意で選出されたグルジアのメニシェヴィキ政権の顧問的な役割を果たしている。ポリシェヴィキはこの政権を軍事的に転覆している。ポリシェヴィズムはロシア的な思想で、メニシェヴィズムは西欧的な思想であると、久間氏は言うのであろうか？
- (10) このような把握については、太田 [1993] および太田 [1994 b] を参照。
- (11) 確かにカウツキーは、『ノイエ・ツァイト』を主宰し、社会主義運動の直面するあらゆる問題に対して何らかの答えを用意する「教皇」であったかもしれないが、カウツキーの思想がドイツの運動を指導するものであったとはいえない。カウツキーたち「マルクス主義者」の論争は現実の運動とは離れたところで展開されたもので、「マルクス主義者」はドイツの社会主義運動の中でパラサイト的なものであった。このことについては、Steinberg [1979] を参照。

#### 参 考 文 献

- 相田慎一 [1993], 『カウツキー研究：民族と分権』昭和堂
- 太田仁樹 [1989], 『レーニンの経済学』御茶の水書房
- 太田仁樹 [1991], マルクス主義理論史研究の課題 (Ⅱ) : 松岡・丸山・田中氏の近著によせて、『岡山大学経済学会雑誌』第23巻第2号
- 太田仁樹 [1993], マルクス主義とネーション・ステート, 『社会思想史研究：社会思想史学会年報』(北樹出版)第17号, 1993年9月
- 太田仁樹 [1994 a], マルクス主義理論史研究の課題 (Ⅴ) : 相田慎一氏の近著によせて、『岡山大学経済学会雑誌』第25巻第3号, 1994年2月
- 太田仁樹 [1994 b], マルクス主義の展開とその歴史的意味, 平井俊彦編著『社会思想史を学ぶ人のために』(世界思想社)第7章
- 太田仁樹 [1994 c], マルクス主義理論史研究の課題 (Ⅵ) : 保住敏彦氏の近著によせて、『岡山大学経済学会雑誌』第26巻第1号, 1994年6月
- 太田仁樹 [1999], 世界システムにおける民族と国家：マルクス主義民族理論の超克にむけて, (若森章孝・松岡利道編『歴史としての資本主義：グローバリゼーションと近代認識の再考』青木書店, 第2章)
- 久間清俊 [1978], K・カウツキーの帝国主義認識, 『鹿兒島経大論集』19-3
- 久間清俊 [1981], K・カウツキーの超帝国主義論 (上) : 民主主義, 社会主義論を中心として, 『鹿兒島経大論集』22-1
- 久間清俊 [1982], K・カウツキーの超帝国主義論 (中) : 民主主義, 社会主義論を中心として, 『熊本女子大学学術紀要』34
- 久間清俊 [1988], K・カウツキーの超帝国主義論 (下) : 民主主義, 社会主義論を中心として, 『熊本女子大学学術紀要』40
- 久間清俊 [2000], 『近代市民社会と高度資本主義：ドイツ社会思想史研究』ミネルヴァ書房
- 久間清俊 [2001], 『近代市民社会と高度資本主義』について, 『経済学史学会ニュース』第17号
- 佐久間孝正 [1986], 『ウェーバーと比較社会学：「人格化」と「物象化」の東西文化比較』創風社
- 田中良明 [1989], 『バルルスと先進国革命：第二インタナショナル・マルクス主義の到達点』梓出版社
- 保住敏彦 [1977], 帝国主義論争におけるカウツキー, 入江節次郎・星野中編『帝国主義研究Ⅱ』御茶の水書房, 第2篇5
- 山本佐門 [1981], 『ドイツ社会民主党とカウツキー』北海道大学図書刊行会
- Mandelbaum, K. [1926], Die Eroerterungen innerhalb der deutschen Sozialdemocratie ueber dasu Problem des Imperialismus (1895-1914), Frankfurt a. M. (保住敏彦訳『ドイツ社会民主党内の帝国主義問題をめぐる論争 (1895-1914)』, 『愛知大学国際問題研究所紀要』第89号, 第90号, 1989年7月, 12月)
- Salvadori, M. [1976], Kautsky e la Rivoluzione Socialista 1880-1938, Feltrinelli Editore.
- Steinberg, H. -J. [1979], Sozialismus und deutsche Sozialdemokratie : Zur Ideologie der Partei vor dem 1. Weltkrieg, Dietz Nachf.

(時永・堀川訳『社会主義とドイツ社会民主党：第一次世界大戦前のドイツ社会民主党のイデオロギー』御茶の水書房, 1983年)